

した。船上でアメリカ軍の点検を受け終わったとき、
いよいよ帰国できるのだとみんな抱き合って泣いた。
船は静かな日本海をすべるように舞鶴に向かった。

3 舞鶴

ナホトカを出発した信濃丸は、真っ青の日本海を静かに進み、まるで夢でも見ているような、感激の船路であった。「あっ、日本だ！」の声にみんな甲板にか
けより、遠くにかすんで見える丹後半島の山々を見つ
めた。みんなの目からは涙、涙、涙。山影もくっきり
見えるようになり、船は舞鶴の港内を静かに棧橋に向
かった。年老いた者、若い者、上級者も下級者も日本
の懐かしさに狂喜した。船はドドッとにぶい音を立て
て止まり、錨が下ろされた。棧橋から一步一步、しっ
かり踏みしめながら上陸する。故国の土だ、懐かしい
日本の土だ。出迎えてくれた白衣の看護婦さんの姿も、
目に痛いほど美しく感じた。上陸後直ちに入浴して衣
類の支給を受け、予防接種、DDTの消毒などを終わ
り、二階の大広間の畳の上に寝ころんだとき、「やっ
と帰国できたんだ」という実感が、ひしひしと身に感

ぜられた、その日こそ忘れもしない、日本晴れの昭和
二十三年六月二十三日であった。

酷寒と白夜のシベリア強制抑留

福島県 相田 正明

一、出生から入隊

大正十二年十二月十九日、会津若松市で出生、家業、
漆器製造販売。家族、両親、伯母、弟。昭和十六年、
福島県立若松商業学校卒業。

伝統産業である会津漆器卸商、鈴善漆器店大阪支店、
東京支店勤務。昭和十八年六月、デパート問屋派遣店
員として上野松坂屋に従事中、戦時下における平和産
業従事者への徴用令（白紙召集）にて、愛知県豊川海
軍工廠へ海軍軍属として徴用される。

寮に入り、海軍の予備下士官による約三カ月の特訓
を受け、朝から晩まで徹底して滅私奉公、生産増強の
団体教育であり、自由も言論もなく問答無用の、まる

で囚人扱いのシゴキであって「格子なき牢獄」でした。兵役は国家国民のためという目的意識があり、入営が男子の本懐なりの時代でしたが、この徴用令は同じ召集でも、その時代における量産体制の労務員であり、国民の関心度も低く、戦時下における一種の悲哀であり、束縛された工員でありました。

昭和十八年十一月二十一日、三重県鈴鹿海軍工廠へ転属。この工廠は、飛行機の旋回機銃や艦船装備の機関砲及び弾薬製造の生産工場でありました。私は現場でなく企画員として、文書係の事務系統であったので、訓練を除くと工廠勤務中は平常でありましたが、当時「軍極秘」の赤印の文書が入る度に、駆逐艦、巡洋艦等の軍艦名が「何月何日帝國海軍軍籍を除く」とあり、当時の戦果発表のニュースと異なり、戦争の行方を不安な気持ちで見えておりました。昭和十九年九月二十二日、現役徴兵の通達を受け、徴用解除となり「格子なき牢獄」から解放されまして、喜んで帰郷しました。

二、入隊からソ連軍侵攻前

昭和十九年十月一日、若松市長名による「入営現役

兵示達事項に関する件」の文書によって、九月三十日午後十一時三十分郡山駅前に集合し、係官の引率で十月一日、千葉県津田沼にある東部第八十七部隊に入営。そして五日後、満州ハルビンへ出発。満州ハルビン第五八〇三部隊（鉄道兵）に編入。その後、満州第四三五二部隊となる。日夜猛訓練の続行にて、徹底的な軍隊教育の毎日でした。しかし、南方での戦局が進むにつれ部隊の装備が激減し、小銃（三八式歩兵銃）が各内務班（約二十名くらい）に一挺となり、あとはノモンハン事件の戦利品である旧式小銃と木銃に替わりました。

部隊も鉄道第二十連隊となり、昭和二十年四月ごろ、南方作戦参加のためビルマ転進となりました。私は幹部候補生であったので教育隊に残り、留守隊は徴用召集した朝鮮兵で補充されましたが、日夜の訓練の厳しさに毎晩のように朝鮮兵が脱走して、その都度非常召集をかけられて捜索に当たったものであります。

その後も、ハルビン郊外にあった香坊の部隊で日夜猛訓練が続きました。

三、ソ連軍侵攻、終戦

昭和二十年八月九日午後、全員営庭に集合がかり、ソ連軍が日ソ不可侵条約を破り、突如ソ満国境を越えて侵攻と知らされ、部隊は緊張に包まれ、ソ連軍の空襲に備え警戒態勢に入りました。

八月十二日ごろ、私たちの大隊は列車で吉林に移動し、吉林郊外の軍用飛行場の警備につきました。装備は戦利品の単発式の小銃と拳銃のみでした。飛行場には飛行機もなく、ただ木製の模擬戦闘機が一機カモフラージュされており、戦局の厳しさを感じました。

八月十五日正午、重大発表があるから全員広場に集合とのことでありました。なんか大戦果でも上がったの戦況報告かと考えました。ところが、信じられない終戦の「玉音放送」でありました。その瞬間全員は茫然自失とし虚脱状態になり、座り込んで地に伏し号泣いたしました。そのとき部隊長の一声は、内地は参っても、まだ関東軍は現存する、最後まで軍人として戦いたい、しかし、天皇陛下のお言葉に従うが部隊は行動を共にしよう、早まったことは考えるな、誠に無念

なりと。一同、内地に向かって最敬礼をいたしました。

その後、市内の学校に集結し、騒然とした中を治安の維持に当たりましたが、一部の連中は隊を離脱して内地へ帰るとか、興安嶺の山脈に立てこもり戦うと言って、数十名くらいが別行動をとりました。部隊長は、死ぬなら全員一緒に、ソ連軍の侵攻して来るまで軽率妄動を起こさず団結しようと呼びかけました。市中は治安も乱れ、住民の暴動、略奪も始まり、五人一組くらいで在留邦人らの保護に当たりましたが、大混乱にて、なす術もなく騒然とした日々が続きました。

三、四日過ぎると、ソ連軍は戦車を先頭に吉林市に入ってきました。住民は素早いもので、中国の国旗を振りかざして熱烈にソ連軍を迎え入れました。我々は学校の校庭に集結をさせられ、無念の武装解除を受けました。周囲を取り巻く住民からは、罵倒と怒号で石を投げられ、日本の軍政下における反動でありました。その後学校内に収容され、ソ連軍に掌握され、外部との接触も断たれ、軟禁状態となりました。

八月末近くソ連軍より、日本兵をウラジオストック

より帰国させるから、ソ満国境近くの「敦化」に移動するので、反乱を起こさず、ソ連軍指揮下に従うようにとのことでありました。部隊長より、信用できないが、たとえシベリアで処刑されようが、全員行動を共にしようということで、食糧、衣類を持てるだけ持って移動が始まりました。市中に出ると、ソ連軍に誘導された在留邦人の隊列とすれ違い、当時の軍歌を逆さにとって「兵隊さんのお陰です」と皮肉たっぷり、うらめしそうに投げかけられました。

また、町の中では異様な光景が目に映りました。それは、ソ連兵十数名くらいが軒並みに並んでおり、日本人の婦女子暴行であったのであります。そして行軍途中に郊外の丘陵地帯で小休止の際、軍服をまとい男装した日本女性が逃げて来まして、「兵隊さん助けて」と叫びながら隊列に入り込むと、ソ連兵が自動小銃を片手に追っかけて来て軍服姿の女性の胸をさわり「ヤボンスキーマダム、ハラシヨ」、日本の女だ、よろしい、と言って連行していきました。自動小銃を空に発射し威嚇し、我々も手の出しようがなく、その女性は

うらめしそうに我々を見つめながら連れ去られ、その姿が今でも目に映り残ります。

当時、敗戦の混乱の中では略奪、暴行と、特に日本の婦女子の悲劇は起こりました。

また、我々にも死の行軍が待っておりまして。吉林―牡丹江―敦化まで約五百キロか、日中は暑く、夜は肌寒い中の歩け歩きの毎日。その隊列は四百名くらいだったろうか、最後尾の馬車に食料を積み、十数名のソ連兵が自動小銃を片手に交代で隊列を見回り「ブイストラ、ブイストラ」（早く早く）と監視されながら、一日五〇キロから六〇キロ歩く強行軍でありました。牡丹江周辺を通過の際には、衣類をはがされた日本兵の遺体が転がり、目を覆うばかりの惨状であった。

三日三晩も歩き続けると極度の疲労が重なり、休憩となると、そのままぱたりと倒れ、道路に溜っている泥水を奪い合ってすりました。持っていた毛布、敷布などの衣類は歩く度に重荷となり、一つ一つ捨てながら身軽になって持ち物は食器としての飯盒のみとなり、夜間は暴民の襲撃を受けたり、疲労困憊の極に達

し、血の小便となり、落伍者は見棄てられ、歩きながら膝まずき地面にひれ伏しました。泥水すすり死の行軍であった。何日歩いたか、目的地の敦化郊外の河岸に辿り着いたときには、全員一斉に川にのめり込み倒れ、顔をうずめて、どうにか氣力を取り戻しました。

四、シベリア抑留地への旅

苦しくつらい死の行軍に耐え抜いて、敦化市の郊外に辿り着いたときには、河岸にテント村があり、ソ連軍監視の下に収容されました。ここに各方面の部隊が集結されるまで、農作地帯の作物を糧として約一カ月の間漫然とした日々を送りました。その間、ソ連軍は、現在の日本本土は大混乱状態であり、帰国できる状況でないから、反乱を起こさず東京ダモイを待つように、とのことでした。しかし、一人になると、ソ連兵より腕時計、万年筆など所持品を奪取されるので複数で行動をしました。

またソ連軍将校は、夜間折を見て黒パンなどの食糧を持ってテント内に入り、物々交換を要請しました。ソ連兵は両腕に時計を三つ四つはめて、腰には目覚し

付きの置時計をぶら下げて得意の絶頂になりハシヤギ回っております。

十月下旬ごろより「東京ダモイ」とのことで移動が始まりました。駅で貨車の中に前後二段の棚が取り付けられてあり、それぞれ真ん中に石油缶を利用した薪ストーブと、扉のところにトタンと板切れで細長い便器をつくり、約五十人くらいが乗り込むように作業をしました。

その際通過する列車はすべて、満州にあった食糧、資材はもとより、施設の機械器具から屋根のトタン、家まわりのトタン塀、なべ、かま、まで金目のものは根こそぎ撤収し、毎日、どんどんソ連へ貨車満載で運び出されておりました。移動前には集結の敦化で幾度となく編成替えをされ、日本兵の団結と交流を非常に恐れておりましたので、同じ車両に乗り合わせてもだれかも知らず、お互いの出身地や部隊の流れを語り、本当に日本に帰れるのか不安と焦燥の中に、約五十両くらいの連結であつたらうか、貨車で出発しました。食糧は満州から調達した食糧、高粱、米、粟などで、

貨車のストープで飯盒で煮炊きをし、途中、引込線に入ったまま一時間も二時間も動かないときは貨車の戸をあけ、飲料水の補給や用便をすませ、ソ連人の姿が見え初めてソ連領に入ったのかと感ずるくらいで、列車は走る。

何日か走り続けたある日、突然車中が騒がしくなった。それは、貨車の上部の小さい窓から「海が見えたぞ」との一声でありました。その瞬間みんなから「日本海だ、ウラジオストックに向かってるのだ」と弾んだ声が湧き上がり、お互い顔を見合わせました。しかし、それはひとときのどよめきでありまして、反対方向のバイカル湖とわかり、一同声もなく静まり返り、奈落の底に突き落とされました。悪い予感が当たり、シベリアで銃殺刑になるのか、みんな一緒に死のうと観念しました。

更に、抑留列車は西へと走り続け、外はすでに冬景色であり、日増しに寒さも厳しくなってきた、貨車の扉に挟んである雨樋のような便器も凍りついてきました。約一カ月以上の貨車生活であつたらうか。十二月

中旬ごろ、シベリア鉄道の間地点「タイセット」で降ろされました。そこは東京ダモイどころか、酷寒の大地シベリアであつた。

五、抑留地の生活

タイセットに着くと、ソ連兵の古い防寒具を渡され着用して、トラックにて約三〇キロ以上離れた山間部の丘陵地帯で降り、所定の地点まで行軍となりました。途中、奥地より出てくるソ連人の女囚の大集団とすれ違い、余りにも多勢にて驚きました。警備のソ連兵に聞くと、政治犯、思想犯とのことでした。交代に我々が、シベリアの原野にある収容所に入りました。なんと幕舎であり、厳しい寒さに身がふるえました。

幕舎の中は、上下二段式に板で左右に区分され、真ん中に薪ストープが設置され、出入口は天幕が二重になっており、誠にお粗末な幕舎で酷寒のシベリアの冬を過ごすのかと茫然となりました。幕舎の収容人員は約五十名くらいで配置されました。貨車生活の連中とはバラバラに編成されました。ソ連側は日本兵を「腹切りサムライ」と言つて、団結と結束に非常に敏感に

なっており、折につけて編成替えが行われたものです。収容所は総勢千五百名くらいだったでしょう。ここからシベリア抑留者の悲劇が始まったのであります。

休む間もなく目の前の山に入り、薪としての小枝拾いが始まりました。終戦から強行軍、そして缶詰状態での抑留列車で着いたところが、零下四〇度以上にもなるシベリアの大地であった。飢えと寒さ、そして絶望！そして酷寒の中での幕舎生活であります。その中で収容所建設のための森林伐採の重労働が強いられました。

シベリアの冬は朝九時ごろより夜が明け始め、午後三時過ぎると日が暮れてくる。その間、毎日毎日伐採と材木の搬出。キコリの経験もなく、森林の中で二人一組での鋸挽きがアッチコッチで始まると、樹木が倒れる寸前に「木が倒れるぞ」の叫び声が入り乱れて、危険も多く、樹木に当たったり下敷きになったり怪我人続出して、死傷者も出て、修羅場の状態となりました。

その上、食事は豆、粟のスープと一片の黒パンであり（日本のキコリは一升飯を食するのに）、更に想像

を絶する寒さでたちまち栄養失調のため、病人続出となり、多くの同僚が死んでいきました。

夜になると、交代で幕舎の中のスーヴに薪を役付け入れ燃やし続け、飢えと疲労で寝床につくと、隣り合って話が出るのはいつも食べ物の話で、夢でもいいから箸を持って温かいご飯を食べたい、また「大福餅」も食べたいと話が始まると、「あんころ餅」と「おはぎ」の言葉も出てきて、出身地によって餅の呼び名が違々と議論し、お互いうまい食べ物の自慢話へと進み、それぞれ故郷に思いを馳せて眠りにつく。

朝になって、「起きろ」と声を掛けると、隣の友は栄養失調と過労ですでに死んでおりました。そして山ざわに穴を掘る準備に入り、雪をかきわけて焚き火をしながら土を少しずつ掘り、凍土をやわらげながらまた掘る、の繰り返しで、一メートルの穴を掘るのに数時間を要して凍土を取り除くと、ようやくスコップで掘れる状態になりました。夕方までかかって一定の穴をつくって土葬をいたしました。亡き友の冥福を祈り、明日は我が身がこうなるのかもしれないと、みんなし

んみりとなり顔を見合わせました。

零下四五度以上になると、すべての作業が中止となります。外で二、三分でも立って寒気に当たると、たちまち耳、鼻が白くなり凍傷状態になります。外気は凍ってボーと音を立てているような感じで、煙突の煙はポコポコと綿が重なって動かない状況となり、まさに寒さの極限状態でした。零下四〇度くらいになるのを待って、付近の山へ薪拾いが始まりますが、食物が腹に入ってませんから気力体力もなく、夢遊病者のように薪をやっと集めても持つ力がなく、束ねて引きずりながら運びました。

この時季に極度の飢えと寒さで、故郷を思い「食いていナアー」とつぶやき死んでいく抑留者が多かったようです。ソ連側の食糧事情も最悪にて、独ソ戦でのアメリカよりの援助物資であった乾燥トマト、キャベツ、卵などがスープに混入されましたが、ほとんど満州から持ち帰った高粱、粟、燕麦などであり、警備のソ連兵も手真似物真似で、ヤポンスキーの分、自分たちの食糧が減ったとグチっておりまして。衣食住があっ

てこそ人間の生活ですが、飢えと寒さの極限の生活では、人間も生きるためには「ケダモノ」同然となり、頻繁に配食用の食かん（食物が入っている容器）泥棒や分配された食事の奪い合いで、まるで野獣のような弱肉強食の争いで、すさまじい状態が続きました。

六、労 役

ソ連側は、今日本は敗戦の混乱で食糧もなく、みんな困っておって帰還兵どころでないから、安定するまでソ連側で日本兵を保護し、一定の作業が終わる夏ごろまで「東京ダモイ」間違いないから、暴動や反乱を起こさず従うようにと常に言っておりまして。

三月ごろから、伐採した松、白樺等により収容所の家屋造りが始まり、適當の丸太に「ミゾ」や「ホゾ」を造り、組立て積み上げて、その丸太と丸太の合間に苔を入れて丸大の壁とし、屋根は松の木を「コバ」にして、みんなの力で家屋らしくなり、浴場も、便所も建てて、つらくて苦しかった幕舎生活から移り始めました。このころより少し食糧がよくなり、湯水のようなスープから、やっとのことでドロンとしたスープに

なってきました。

収容所が建ち始めると、更に奥地の収容所へ移動や編成替えとなり、二度三度と別の収容所へ変わりましました。その間は丘陵地帯や原野を切り開いて収容所間の道路工事を強いられ、ソ連の下士官に「ムチ」を振って叩かれ、トラックに土入れをし、「フィストラ、フィストラ」早く作業をやれと、牛馬のようにコキ使われました。「ノルマ」を上げれば食事も増量すると言われ、アヤツリ人形のように黙々と働きました。

その間、ソ連兵は自動小銃を持つての監視で、抑留者の中で頭がボーとなり、夢遊病者のようにフラフラと現場から離れて射殺された者も見受けられました。一定の作業が終われば更に奥地へ移動し、仲間とかグループなどができるのを極端に恐れて、隊員の交流を規制されました。

そして、鉄道建設という過酷な重労働が始まりました。タイセツトを起点として東へ三百キロ付近まで、バイカル・アムールを結ぶバム鉄道建設であります。道路建設と鉄道の路盤工事でノルマが与えられまして、

ノルマ達成の作業隊は食事の増量の確約と、そして完成すれば間違いない「東京ダモイ」であり、働かざる者食うべからずとケシかけられました。

シベリアの夏は白夜であり、夜中の二時ごろより夜が明け始め、午後の十時過ぎが日没であります。労役の時間は、午前八時三十分収容所の門があき、厳しい人員点検を受けて出発、帰門は午後十時で、約十二時間の重労働で、東京ダモイを信じて白夜のシベリアの夏との闘いでもありました。長い一日の作業中の食事休憩（食事は大きな樽にスープやカーシャを詰めて馬車で運んでくる）には原野の草（セリなど）をスープに入れたり、モグラ、カナヘビなどの小動物を見つけて、火を焚いてスコップの上で焼き、何でも食べました。食事をとつても年じゅう、空腹状態にて、場所によって山百合を見つけ、その球根と小動物を練り混ぜてスコップを鉄板にして焼いて、腹いっぱい食べたときは生きた心地がして、当時は最高の思いでありました。秋になるとキノコが出るので、みんなで奪い合つて採りました。ソ連兵はキノコは下痢すると注意しまし

たが、我々が食べるので驚いておりました。ここで死んでなるものかと、親を思い故郷を思い、「東京ダモイ」を夢見て、氣力をいつもみんな持ち続けました。

七、抑留者の統制管理

昭和二十一年に入ると各收容所も出来上がり、收容所の自主管理も進んできました。ソ連側と、労役、食事などについて交渉するようになって要求の場が開けました。またソ連の政治局員の将校による労役の時間、作業内容、施設の巡回査察があり、食事の内容もよくなってきて、スープもシャブシャブからドロリとなり、塩干物のニシンや粥のような米飯もついて、どうにか食事らしくなり、ノルマが上がると実際に増量となりました。また医務室も備えられ、何回か女医が診断に来所し、裸にしてお尻をつねって判断し、肉づきがあると外仕事、ないと内仕事と区別されました。病弱者は一カ所に收容されて洗脳教育が始まり、收容所の一角に集会所を設けて「スターリン万歳、日本国天皇制打倒」のスローガンも一帯に広がってきました。そして赤化教育的な自主演劇も催されるようになった。

りました。日本新聞も出回り、オルグ活動もあり、なんとなくお互いに腹のさぐり合いとなってきて、密告も出たり、黙して語らず、対人関係に敏感になりました。ソ連側にこびる者も出てきました。また適当に休暇が与えられ、浴場でお湯を使って体を洗って、その間衣類は地下に温度室ができてそこで熱処理をしたり、衣類の交換もできました。そして赤化教育に順応した者を長として收容所に配置し、洗脳教育が始まり、要求実現の場とし活用しました。

收容所の施設内容も我々の手で改修したり、酷寒の冬に備えてストーブも二個三個と増やし、それぞれ居住性のよいよう努力しました。そして重労働の鉄道建設も一定の休憩が与えられて多少よくなり、ノルマも作業に準じて調整するようになりました。

八、抑留中の生活と極限状態における意識

前にも述べたが、一時はシベリアで銃殺刑と思ったが、ソ連は我々を、独ソ戦で疲弊した国土復興、即ちシベリア開拓に、何年かかるかわからないが、労役に利用するため連行したような感じが見受けられ、必ず

「東京ダモイ」とその都度ソ連に言われると、そうだが、必ず祖国日本に帰るんだ、死んでたまるか、故郷に帰りたい、両親に会いたいとの信念が氣力となった。

月夜の晩には、お月様やお星様に手を合わせて、どうか故郷の空で再び拝むことが出来ますようにと心を充実させ、掃りたい、会いたいの一心中で頑張る執着を持ち続けました。酷寒や過酷な重労働も、ここでは死ねない、倒れても、這ってでも帰るんだ！いつの日か必ず訪れると心に言い聞かせ頑張り、耐え抜き、極限状態における意識とは、一日一日が生きる戦いでした。

九、帰還

昭和二十二年に入ると鉄道建設も一部完成し始めてきました。健康管理も女医が検診して、またお尻をつねって、肉づきによって一級・二級は労役、三級・四級は軽作業と区分し、病弱者からぼつぼつダモイが始まったとの情報が流れてきまして、日本新聞にも記事が載り始め現実のものとなりました。検診の結果、我々の収容所は病弱者が多かったので、働かざる者食うべからずを原点とされた。

五月ごろでしょうか、列車の都合がつき次第「ダモイ」と言われましたが、またシベリアより転進して別な場所で労役かと半信半疑でおりました。また騙すんだらうと思う反面、帰れるということが実感として胸に迫ってくるものもあった。

七月ごろと思うが、「列車が着いた、東京ダモイだ」と伝達され、一同小躍りして喚声をあげた。余りの現実には直面して、輸送車に乗り込んだ記憶が浮かんてこない。ただ、何日乗ったか定かでないが、バイカル湖を通ったときには、今度こそは日本海へ向かっているとしみじみ感じ、今でも車中より眺めたバイカル湖の景色がくっきりと目に浮かんてきます。約一カ月くらいの列車の輸送で「ナホトカ」に到着。港の見える丘陵地帯のテント村に収容されました。この期間の出来事は、帰国できるんだという思いに打ち消され、忘れ去りました。

ナホトカのテント村に入ると、天皇制打倒、日本本土に上陸し、民主運動を展開するソ同盟の一員として闘うことを誓うと頻繁に呼びかけられて、その思想活

動と洗脳教育に驚きました。我々の作業大隊は抑留中の生活でも、余り赤化教育にも染まらず程々の考えでありましたので、お互いうまくやって行こうと心の中で感じました。配船が決まるまで待機とのことで、労役や作業もなく日本から船が来るのを待つことになりましたが、日夜民主化運動が激しくなっていて、「ソ同盟万歳」で赤旗を振り歌を唱和し迎合しました。我々の言動は民主化の程度が監視されている。我々も民主共産化したごとく、時には日本政府の批判を行い順応しておりました。反ソ的な行動をとると、またシベリアで重労働になると噂が飛び、神経をピリピリ使っておりました。

十月上旬に待ちに待った乗船命令があり、港に集合しましたが、まだ信じ難く、樺太へ連行かもしれないと待機していると、見えました。「日の丸の旗を掲げた日本の船」が入港してきて、乗組員も看護婦さんも間違いなく日本人です。

みんな感きわまり、顔をクシャクシャにして涙を流し、喜び抱き合いました。それでも乗船するまで疑念

を持っておりました。いよいよ乗船開始。みんな「兵隊さん、ご苦労さんでした。間違いない日本の船です。ご安心ください、無事本国へお送りします」この一言。夢ではない現実だ。涙・涙、笑顔そして笑顔、喜び、感激、夢心地でありました。船出してナホトカの港を離れ、遠くシベリアの彼方を思い、白夜と酷寒の中の重労働。苦しい、切なかった、悪夢のシベリアよりの生還だ。

その名は「栄豊丸」約二千名乗船でした。

船内生活はオルグ活動も民主活動もなく平穩でしたが、台風に見舞われ、大暴風となり前後左右に大荒れで甲板にも出られず、二日二晩は船底に閉じこもったままでした。

三日目に平穩になると、「島が見えるぞ」と声上がり、みんな甲板に出ると、見えました、見えました。日本列島が水面上に細く長く見えました。そして歓喜と興奮の中に「舞鶴」の青々とした樹々、素晴らしい日本の山々、緑が目にしみる。

港の湾内に停泊、小船に乗り移り棧橋へ到着。大勢

の方々の温かい出迎えを受けて、帰国第一步を印しました。昭和二十二年十月十三日です。

直ちに海兵団の旧舎に入り、風呂に入り、そのまま出るとDDTの消毒を受け、新しい旧海軍の作業服を支給されて旧兵舎に落ち着きました。そこで食事の注意があり、「皆さん、胃腸が流動食で慣れておられるので「お粥」から食べ始めてください。当初からご飯を食べて死んだ人がおりますので、四、五日は流動食で胃腸を慣らして、徐々に普通食になりますので、落ち着いてゆっくり食べてください」なるほど、二年間以上、スープや歯で噛んで食するものは全然なく、箸でつまむような食もなし、全くの流動食であったから、普通の御飯をいきなり食べたら胃腸が詰まってしまうのである。

食事の調整で胃腸を慣らし静養生活が過ぎてから、米兵の二世に、公衆電話のボックスのような個室で一人一人順番に、抑留地点と状況をあらゆる角度から調査を受けたり、また思想的な話も出たり、面接を受けました。その結果、過激的な赤化思想に洗脳された者は選別されたり、アメリカ側によって沖縄で重労働に

回されるとの噂も出ました。帰国早々に米ソの思想的な対立を見せつけられました。

復員者に対する税関、面接、復員手続、健康診断等に五日くらいかかりました。我々の復員組は特に問題もなく、上陸後一週間目くらいから待ちに待った帰郷が始まりました。「いよいよ待ちこがれた故郷へ向かって東舞鶴駅から盛大な見送りを受けて、特別列車に乗り込みました。引揚援護局より八百円の旅費を支給されて、京都、上野を経由して、天にも昇る嬉しさに心も弾み、喜びいっぱい、無我夢中にて懐かしの会津若松駅に到着し、地元の人々に迎えられ、興奮と感動の中に我が家に戻りました。

昭和二十二年十月二十三日の午後でありました。両親と抱き合って嬉し涙にくれ、そして夢にまで見た白米の御飯と母の料理を噛みしめました。

十、帰国後の生活

帰国後は約二カ月静養し、衰弱した体の回復と栄養補給につとめ、その後、丸々と太り、体調の万全に意を尽くしました。

終戦後の社会情勢にも慣れ、絶えずシベリアの苦しみを念頭におきながら、家業の漆器製造販売に励みました。

昭和二十三年五月十三日結婚し、常にシベリアを念頭に、思想的な問題にもかかわらず、自分の信念で生き抜きました。会津漆器業界の一組合長を経まして、昭和五十二年ころより全抑協の組織運動に参加し、現在、会津地区連合会長として、シベリア抑留の実態と悲劇を訴えるべく頑張っております。

異国の丘に無念の死を遂げた友の冥福を祈ってやみません。

【執筆者の紹介】

大正十二年十二月十九日生まれ。

昭和十六年、福島県立若松商業学校卒業。同十六年四月より、会津漆器販売のため、デパート問屋派遣店員として上野松坂屋勤務。

同十八年六月、戦時下の徴用令動員にて豊川海軍工廠軍属要員となり、同年十一月、鈴鹿海軍工廠に転属

をする。

昭和十九年十月、現役入隊、津田沼東部第八十七部隊。同十月二十日、満州ハルビン第五〇二部隊。後で鉄道第二十連隊とかわる。二十年四月、幹部候補生合格。二十年八月、吉林駐屯。終戦。敦化集結。十二月入ソ。同月、タイセツト地区収容所に入る。昭和二十二年十月十三日、復員。

抑留者としては若い方である。

私が相田正明氏と知り合ったのは、昭和五十三年の四月ごろだと思う。

右傾に寄らず左傾に寄らず、常に中庸の線を見透す活眼の人物であった。今も変わらない。

現在、全抑協県連副会長、会津地区連合会長として、平和祈念事業に活発な働きを見せており、また会津若松市議会議員五期目の役を果たしておりながら、会津漆器工業協同組合理事長として、地域産業の振興に力闘いたしておられます。

快活明朗な人となります。

(福島県 村上 武)